

多種類の薬を同時に服用する多剤併用(ポリファーマシー)。医療機関を自由に選べる日本特有の現象ともいえるが、薬の組み合わせや量によっては副作用が出ることもある。体の複数の箇所に不調が現

れる高齢者ほど、その傾向が強く、医師や薬剤師は「安易に薬を飲み続けることによる危険性に、目を向ける必要がある」と警鐘を鳴らす。

(片岡達美)

医院掛け持ち、薬もいろいろ…

多剤併用、 気をつけて



「薬は化学物質であるということを再認識してほしい」と訴える笠井秀一副会長＝神戸市中央区下山手通6、県薬剤師会館

「こんなにたくさん薬を飲んでいますが、大丈夫でしょうか」。神戸市灘区にある内科などの診療所「井上クリニック」を訪ねた男性(79)は、井上隆弥院長に相談した。男性は高血圧や腰痛などの症状があり、整形外科と別の内科を受診。鎮痛剤や血圧の薬、アレルギー症状を抑える抗ヒスタミン剤など、計18種類もの薬が双方の医院から処方されていた。

さらに「血液検査をしてみると腎臓の機能が悪く、腰痛治療のため処方

認識不足

現在は血圧を安定させる薬に限り、計8種類にまで減らしたが、症状は安定しているし、痛みも気にならないという。

多剤併用の危険性について説明する井上隆弥院長＝神戸市灘区友田町3



組み合わせ、量により副作用も

こうした状況を招いてしまった原因に、井上院長は「痛みに対する医師の認識不足」を挙げる。

「痛みには骨折や裂傷など病態がはっきりした痛みと、慢性の腰痛や肩凝りなどのような病態があいまいな痛みがある」とし、「日本ではまだ痛みが起る病態を見極めることなく、安易に痛み止めを処方する傾向がある」と指摘。その結果、本来は必要のない量、種類の薬になってしまつてみる。

市販薬でも

「かかりつけ医制度を定着させ、薬も一元的に管理することができれば」と話すのは兵庫県薬剤師会の笠井秀一副会長。だが現在、医薬分業は70%近くにまで進み、「薬局を1カ所に決めて

「お薬手帳」で一元管理を

いる人はまれ」と分析する。

そうした中、多剤併用を防ぐのが「お薬手帳」だ。「複数の医療機関にかかる際、医師にも手帳を見せれば必要な分しか薬は処方されないはず」ただ、「できれば多めに薬を持ってほしい」「たくさん処方してもらう方が安心する」と考える患者は多く、お薬手帳もなかなか定着しないのが実情という。

安易な市販薬の服用も、危険性をはらんでいる。総合感冒薬には解熱剤、せき止め、痛み止めなど6〜7種類の薬が複合的に入っていて、「それだけで多剤併用と云つていい」と笠井副会長。「薬の種類が増えるほど、副作用の危険性も増す」ということを認識してほしいと呼び掛ける。

からだ